

刈貯水池東岸大岩山 (1ex., 6-VII-1973, 1ex., 8-VI-1974, 1ex., 20-VII-1974)。氷上郡沼貫 [山本、1953]。城崎郡日高町岩中 [高橋、1976]。美方郡浜坂町字都野神社 [磯野、1985] (X II-1989)

追記。本稿脱稿後平成2年1月14日(1990)西田氏より以上のべたものの内、ユリクビナガハムシ 5exs. トホシクビボソハムシ4exc. をわざわざ御恵送頂いた。厚く御礼を申しあげさせて頂く。

また、三木中学校生物部採集報告書に記録されているヤナギホシハムシ2exs. も御恵送頂いたが之は残念ながらアカタデハムシ *Pyrrhalta semifulva* (JACOBY) と同定すべきであった(西田氏はシダレザクラをすくって得たと言っておられた 14-V-1988、11-VI-1988、サクラを食草にしているハムシである)。

(I-1990)

ニシキキンカメムシをめぐって

高橋 寿郎

1989年8月15日一通の封書を受けとった。差し出された方は大西^{あきお} 且と言う方で筆者にとっては初めての方である。拝見するとニシキキンカメムシの生きている写真を撮りたい。昆虫が好きで10年程カメムシに興味を持って調べているとのこと(同封の名刺には小学館第一編集部副編集長とある)。神戸に来た時拙著「六甲山の昆虫たち」を購入、読んでいてニシキキンカメムシが兵庫県の赤穂郡上郡と西宮に記録があるが(p.104)これらの詳しい産地とどんな所にいたかなどの状況を教えて貰えないだろうかとのことであった。実は上郡産のものは1967年8月神戸大丸屋上での恒例の神戸生物クラブ鑑定会の席上へ米村和繁氏採集の6 exs., (3-V-1966)を持参されて見せて頂いたもので産地が赤穂郡上郡と言うだけで詳しい場所とか産出状況の説明は無かったと思う。西宮での記録は水谷芳昭・殿男和男氏が西宮市尼ヶ谷で採集された1♂2♀(昆虫と自然、Vol.4, No.3, p.24, 1969)である。実は筆者も自分で本種を採集したことは無く県下の記録があるのでなんとか自分の手で採集して見たいものだ、と思いつつ現在にいたっているむね返事させて頂いた。同じ風のアカスジキンカメムシは兵庫県下でも割合とお目にかかれるのに、このニシキキンカメムシはどうも良くわからない。色々の文献を見ても九州では割合いるようだが、その他の地では可成り局所的産出ししか知られていないようなので一つ県下での産を確認する努力をして見たいものだと思うと同時に、会員の皆様にも是

非この美しいカメムシの産地の発見に協力を頂きたいものだとニシキキンカメムシについて若干の今迄の知見をまとめて見た。十分な文献が無いので大変粗雑なものになっていることをお詫びする。まず初めにこのカメムシの全国的な分布を見てみる。

本種は御承知の通り故江崎悌三博士が1935年 *Poecilocoris splendidulus* ESAKI と命名記載された種である（むし Vol.8, No.2, pp.105-107）。タイプに使用されたのは♂で♀は未知としてある。タイプの産地は Holotype, ♂, Hikawamura, near Tokyo, Prov. Musashi Honshu August 12, 1934. paratype, ♂, Kurosawayama, Nachigun, Prov. Kii, Honshu July, 1933. paratype ♂, Hirao near Fukuoka, Prov. Chikuzen, Kyushu となっている。即ち東京都氷川・奥多摩と和歌山県黒沢山、福岡市平尾となる。東京の産がタイプにあるのだがその後東京並びにその近くで本種が採集されていると言う記録を筆者は知らない。

和歌山県でのタイプの産地は那智郡黒沢山で植村利夫氏が採集されたものである。この那智郡と言うのは現在では無い様に思うのだが。最近の場 續氏が黒沢山沼地で本種が多数いたことを報ぜられたが、有田郡金屋町黒沢山沼地となっている（KINOKUNI, No.24, p.2, 1983）。和歌山県からは他に次の様な産地の記録がある。海草郡野上町（後藤 伸、南紀生物、Vol.13, No.1, p.19, 1971）、有田郡広川町霊巖寺山（楠井善久、昆虫と自然、Vo.7, No.3, p.33, 1972）。

九州の産地はタイプは福岡市平尾となっているが、江崎博士は記載の翌年古処山で200頭も採集されたと報告（むし、Vol.9, p.37, 59-60, 1936）されたことからこの山が一躍有名になったようであり多くの文献に産地の一つに必ず古処山の名は出て来る。同時に行徳直巳氏はこの山で採集した本種を飼育された記録を発表しておられる（ROSTRIA No.3, pp.55-56, 1966）。なかにはこの山での採集失敗談もあつたりする（太田良太、KORASAMA Vol.26, No.1, p.16, 1988）。

九州での産地は他に余り知られていなく日高輝展氏も筑紫方面での発見は必ずしも可能ではないとされていたりする（筑紫の昆虫 Vol.2, No.2, p.23, 1957）。

大西氏からの御教示では鹿児島県霧島山にいとされているが詳しいこの記録は見たことが無い。

岡山県での本種の発見は1956年5月3日が初めてとのことである。その後何人かの方の報告が出た後、小野 洋・近藤光宏氏による“ニシキキンカメムシの生態（予報）”と題して報文が発表された（すずむし Vol.16, No.2~4, p.42-45, pl.1, 1966）。この産地は阿哲峽（阿哲郡・新見の西側）のものであるが最近上川郡成羽町（高梁の西方、阿哲峽の南側）の産も報告されている（すずむし No.122, p.31, 1987）。岡山を代表する虫の一つと言うこともあって次の様な文献があるのは岡山県の特徴である（他府県ではこの様な文献は見られない）。1968年に倉敷昆虫同好会著「岡山の昆虫」（岡山文庫）の表紙には美しい本種のカラーで飾られており、また初めのp.14-15には各ステージのカラーで紹介されており、P.156-157に写真を入れて解説されている。1978年岡山県から出版された

「岡山県の昆虫」(岡山県昆虫生息調査報告書)の中にも解説されている(p.29)。1988年出版された倉敷昆虫同好会編「岡山の昆虫」では新しい産地や成羽町でのカラー図説がある(p.142)。

広島県では比婆郡帝釈峽(帝釈峽内の雌橋付近の磯上で採集したとある。lex.,15-V-1976)の記録があるだけである(比和の自然、p.248,1977。帝釈峽の自然、p.414,1987)。

東へ行って三重県では藤原岳が知られている(大川親雄、藤原岳の昆虫、p.20,pl.8,1961。石関正弘・庄山 守、ひらくら Vol.14,No.10,p.88,1970)。

愛知県南設楽郡鳳来町黄柳野で採集された幼虫を代替餌により飼育した記録がある(守屋成一・大久保宜雄、Rostria No.38,p.558,1987)。

静岡県水窪町(井上智雄、昆虫と自然 Vol.15,No.14,p.11,1980)。

高知県南国市。大西氏の御教示による。1986年8月に採集されているとのこと。



さて海外の記録と言うのは江崎梯三博士により神保一男氏が釜山(京畿道)にて1933年8月5日採集されたものを土井寛腸氏の手を経て検したものが本種であったとされたのが朝鮮からの初めての記録となる(むし Vol.9,p.37,1936)。京畿道であるからソウルの西方になるのであろう。朝鮮からの記録はこれだけしか見られなかった。さらに中国での記録は今迄全く知られていなかったが1985年 Z. SHI-MEI, Economic Insect Fauna of China Fasc. 31 Hemiptera (1) を見ると本種が記録され図説されていた(p.46,pl.XL-114)。分布として貴州(施秉、涓潭となっている。地図で見ると

重慶の南、広西省の北にあたり可成り南の位置) (緯度からすれば沖縄あたりにあたる所で) 大変離れ地点にいることが報告されている。

以上が分布の大体のところである。日本での産地は石灰岩地帯がそのほとんどであることは注目されてよい。何かつながりがあるのかどうかと言うことはこれからの調べによらなければと考えられる。またこの虫の生態というか生活史などは小野、近藤両氏のもの(1966)、行徳直巳氏のもの(1966)以外に小林 尚博士が各ステージを詳しく図説されたものがある(四国昆虫学会々報 Vol.9, No.3, p. 81-91, 1967)。

食草については小野・近藤両氏によるコウゾ又はこの近縁のものの果実をよく吸液すると。また小林博士はクワの果実で4令迄の飼育が出来たとあり(1966)、九州の古処山ではイワフジ(ニワフジ)(マメ科)から多数発見吸液活動を確認したとある(烏瀧、1936)。行徳氏も古処山で採集した幼虫の飼育を試みられたがバラの実と新芽、ビワの未熟果等を入れたがバラの新芽には来て吸汁するがビワの方にはこなかったと結局飼育はうまくゆかず成虫にはならなかったとのこと(1966)、守屋・大久保両氏は代替餌(乾燥ダイズ種子と生ラッカセイを代替餌とする)で飼育に成功、累代飼育も可能との見解を発表されている(1987)。色々と報告はあるのだが、決定的な食草と言うのは今の所ははっきりしていないのではないだろうか。

そして本種の図説は次の図鑑類に見ることが出来る。

1950. 江崎悌三、日本昆虫図鑑 改定版

(p.188, f.467)。

1965. 宮本正一。原色昆虫大図鑑 第3巻

(pl.58, f.16a, b, p.76)。

1975. 立川周二、学研中高生図鑑。昆虫Ⅲ

(p.105, 309)。

兵庫県での産地は初めに記した様に赤穂郡上郡と西宮市塩瀬尼子谷の2ヶ所だけである。西宮市の地点は比較的近い地点に思うのだがこの塩瀬尼子谷の付近は可成り造成がされていて住宅街がそばに出来たり切り崩しがされていると言うのか谷の入口近くには北摂建材工業碎石場と言うのが地図上に出ていたり、そのあたりいたる所に碎石場と言うのがこの最近の地図上には示されている。何分にも採集されたのが1968年であるから、かなり前であり、様相がすっかり変っているようなのでうまくその付近に入れるかどうか疑問がある。たまたま1989年度の神戸生物クラブの鑑定会が開催されたので出席しておられた西宮在住の近藤浩文先生に状況を御尋ねしたが、最近三宅隆三先生が調査に行っておられマムシの多いのに驚いておられたと言う余り面白くないお話しで、詳しく三宅先生からお話

を聞かせて頂こうと期待していたのに、とうとうその年には三宅先生が出席されず良くわからないままになってしまった。たまたまその鑑定会の席上に新家 勝氏もお見えになってそのニシキキンカメムシの話を御聞きになり帰宅後調べたらニシキキンカメムシの幼虫と思われるものをその尼子谷にあった夫婦岩（今は無くなっているとか）のヤブツバキの葉上から得て所有していると（16-VII-1963）カラーの図送そえて御教え下さった。図の感じからすればニシキキンカメムシらしいのであるが見せて頂く迄何とも言えない。ただなんとなくこのあたりを調べる必要があることは事実である。

ただ、この谷のすぐそば西宮市の船坂地域の調査を1987年6回程したがアカスジキンカメムシが大変多くいる所で、成虫・幼虫共に採集できたが特に9月4日、9月11日（11日の方が多かった）何十頭と言う幼虫に出会ったりしている。同じ属の虫であり近い地点でもあるので、なんとか機会を見つけてそのあたりを調査出来たらと色々計画している次第である。

因にこのニシキキンカメムシは年1世代で5齢幼虫態で越冬し、4月中旬頃から5月上旬にかけて羽化。成虫は5月中、下旬に交尾、5月下旬から産卵活動を始め、遅いものは6月中、下旬まで続けられると。卵は食草の葉裏に14個の塊として産付けられる。孵化した幼虫は8、9月頃迄に5令幼虫となり秋には落葉下などで越冬に入ると（小野、近藤、1966）。

(SEP.1989)

<付記>

脱稿後高知県での本種の記録とその飼育記並びに美しいカラープレート付の報文が“げんせい”（高知県昆虫研究会々誌）第52号（1987年11月）第53号（1989年1月）に夫々発表されていることを知った。

アオドウガネの食草についての報告（続報その4）

新 家 勝

1989.8.4 西宮市田近野町。

背丈1.5メートル余りのウルシの幼木に、数10頭の本種が集まり、葉を食っていたもの。葉は葉脈だけになって葉柄ごと本種の重みで垂れ下がっており、葉脈でできた網袋にアオド